

回心

寺川俊昭

『教行信証』「総序」は、親鸞が帰敬した浄土真宗の大綱を、本願・光明・名号・信心の四法を以て、次のように語る。

竊以、

難思弘誓、度難度海大船、

無碍光明、破無明闇慧日。

故知、

円融至徳嘉号、転悪成徳正智、

難信金剛信楽、除疑獲証真理。

1 (寺川)

ここで竊に以みられているものは、「難思弘誓」及び「無碍光明」の二徳を以て表わされる如来であり、むしろこの

功用における如来である。その如来の現前として理解される事実、もしくはそこに如来を自証する事実が、この如来の表白において、「度難度海」、「破無明闇」として自覚されている点に、私は十分の注意をしたいと思います。それは、この「度難度海」、「破無明闇」という事実は、一心帰命の信として衆生に発起する、本願の行信の利益にほかならぬからである。のみならず「総序」は更に、この本願の行信の機である衆生の相を、

捨穢欣浄、

迷行惑信、

心昏識寡、

悪重障多。

と浮彫りにする。このような衆生の生の現実こそ、難度海

であり無明闇であるというほかは、あるまい。その衆生の重い現実を度し破するはたらき、それこそが如来の功德、恩徳にはかならないのであるが、同時にそれは、

称名能破衆生一切無明、能滿衆生一切志願。

と讃嘆される通り、端的に本願の行信の功用として了解されるべきものである。そして衆生に發起する本願の行信は、至徳の嘉号と仰ぐべき本願の名号の現実態にほかならぬのであるから、上記の真宗大綱を語る「総序」の文が、「至徳嘉号」及び「金剛信樂」の功用として語る、「転悪成徳」、「除疑獲証」は、前述の「度難度海」、「破無明闇」と全く

同じ事実を踏まえつつ、一方はそれを如来の功德として讃嘆し、一方はそれを行信の功德として表白したものと了解して、誤りはないであろう。実はこの点に、私は親鸞の仏教的自覚の独自性の眼目をみるのである。

以上の考察を要約すれば、少くとも親鸞の自証において、如来の功德、恩徳と、衆生に發起する行信の功德とは一如である。その限り、如来と衆生の行信とは、その位を異にしつつしかも深い対応関係があることに、親鸞の思索は思い到っていたに違いない。そしてこの対応関係の道理を、親鸞は回向という言葉に託して自覚し、また語ったに違いないのである。この自覚を明確に語る、親鸞の意味深

い表白を聞こう。

爾者、若行若信、無有一事、非阿弥陀如来清淨願心之所回向成就。非無因他因有也、可知。

疑問の余地なく、親鸞は行信を以て、如来清淨の願心の回向成就の事実として把握している。ここに明確に語られているこの行信理解が、親鸞教学の根本命題の一つであると、私は了解する。

二

凡そ行信、より厳密には選択本願の行信という自覚こそが、仏者親鸞の根本的立脚地であった。親鸞における選択本願の行信の確立が、本師源空の選択本願念仏の教説との値遇を縁としていることは、もはや改めていうまでもない周知のことであろうが、この値遇とそしてこの値遇によって得た自覚の意味を、親鸞が正確に把握することができたのは、『大無量寿経』の「願成就の文」といわれる教説によつてであったことも、ほぼ間違いないことができる。そして願成就の文がこのように読まれた時、それは釈尊の教説でありつつも、実は自らの本願の行信確立の原光景を語る教説として、親鸞の信仰的実存においては今現在説法する教言として聞かれていたことも、間違いはないであろう。

う。

十方恒沙諸仏如来、皆共讚嘆無量寿仏威神功德不可思議。

諸有衆生、聞其名号信心歡喜乃至一念。至心回向。願生彼国、即得往生住不退転。唯除五逆誹謗正法。

ここに所謂「諸有衆生、聞其名号信心歡喜乃至一念」が、衆生における行信の成立を語る教言であり、それが十七願成就の教説との値遇によって衆生の上に確立するものであることは、いうまでもない。そして「至心回向」の教言は、この真実教との値遇に賜わる一念の淨信が、如来の至心即ち清淨にして真実なる如来の願心の回向成就であることを告げるものである。願成就の文の教言をこのように読んだところに、親鸞が行信の特質をどのようなものとして自証したかが、見事に語られている。更に「願生彼国、即得往生住不退転」とは、このように如来願心の回向成就という特質をもつ行信の、衆生に実現する利益を語る教言であるう。

このようにして成立する行信を表白すれば、それは取りも直さず『願生偈』の最初に表白されるあの世親の自督の言葉、

世尊、我一心帰命尽十方無碍光如来、願生安樂国。

にまぎってすぐれた表白は、ないであろう。その意味で世親のこの一心帰命の表白は、願成就の文の教説の歴史的証言として特記すべき、本願の行信の表白である。この一心帰命の信の表白において、私は次の意味深い事実注意到したい。それはこの表白においては、如来の名号と衆生の行信と、この二つが一如であり、分ち難く一つであるという事実である。しかも帰命尽十方無碍光如来なる名号について、その帰命の深義は、親鸞の名号解釈によって、「本願招喚之勅命」と捉えられたことは周知の通りである。その了解をしっかりと踏まえるならば、一心帰命なる衆生の行信は、如来の願心が衆生の上に名のり出た事実そのものであるというて、誤りではないであろう。このような行信の了解のところにもまた、先に尋ねた行信をもって如来清淨なる願心の回向成就とするあの深義が、くっきりと浮彫りになっていることを、われわれは改めて知るのである。

このようにして知られる願成就の文の中の最も意味深い一句、「至心回向」について、親鸞は例えば『一念多念文意』において、次のような独自の解釈を施している。

至心は、真実ということばなり。真実は、阿弥陀如来の御ころなり。

回向は、本願の名号をもって、十方の衆生にあたえた

まう御のりなり。

この回向の解釈において、親鸞が明らかにしようとしていることは、「聞其名号、信心歡喜乃至一念」と教説される、衆生に發起する一念の淨信は、如来の至心即ち眞実なる願心の回向成就の事實にほかならぬということである。そしてこの一念の淨信を表白するならば、上述したように、一心帰命尽十方無碍光如来という『願生偈』の表白に、その典型がある。それが「念仏申さんと思ひ立つ心」の表白にほかならないし、そこに本願の名号が浮彫りになっていることを、私は十分に注意したい。敢えていえば、この「念仏申さんと思ひ立つ心」もしくは一心帰命の信こそ、本願の名号の等流の事實そのものであるといつてよいであろう。『一念多念文意』における回向の釈義を、本願の名号についてのこのような了解を踏まえて了解し、それを多少強調的にいうならば、次のようにいうてよいのであろうか。即ち、「本願の名号、われらにあり」という信念の現前、それが取りも直さず、回向の事實であると。

三

この回向について、親鸞は極めて独自の解釈を施す。

(1) 凡積回向名義、謂以已所集一切功德、施与一切衆生、

共向ニ仏道。(証卷所引、『浄土論註』)

(2) 云何回向、心作願。不捨苦惱一切衆、回向為之首、
カニシメタマフナリ
クニケルガ 得レ成就大悲心一故、施ニ功德。(『入出二門偈』)

これらの文章に対してつけられた独特の訓点、即ちこれらの文章の読み方に託して表明された親鸞の了解を尋ねれば、親鸞は回向の主体を明らかに如来と了解していたことは、疑問の余地なく明らかである。そしてこの了解が、親鸞に自らの行信確立の原光景を語る教説である願成就の文中の意味深い一句、「至心回向」を、「至心ニ回向セシメタマヘリ」と、全く独自の読み方をしたことを相い応じていることは、いうまでもない。

親鸞は、更にいう。

(1) 言発願回向者、如来已発願、回施衆生行之心也。

(2) 南無阿弥陀仏の回向の

恩徳広大不思議にて

往相回向の利益には

還相回向に回入せり。

これによって尋ねれば、回向の事實は端的に名号の回施であり、名号の施与である。回向の語義は、あるいは回轉趣向と、あるいは回思向道とさまざまに解釈し得るであろうが、そして親鸞教学にあっては、回向は如来清浄なる願心

が衆生の行信として回向表現するその道理を表わす言葉であるが、回向の端的な事實は、名号の施与である。われらに本願の名号が回施せられているという、その端的な信念の事實である。法蔵菩薩の願心が、衆生の上に南無阿弥陀仏と名告り出た、その端的な事實である。このように、回向を本願の名号の施与という極めて具体的な事實において捉えたところに、私は親鸞の仏教理解のもつ、極めて現実的な知見をみるのである。

名号の回施は、衆生にとっては一つの恩恵であり、大きな恩徳であるが、この本願の名号が行信せられるところに感得されている激しく名告り出るもの、激しく回向表現するものの自覚が、重要であろう。それは直接には「回向為首、得成就大悲心故」といわれるように、如来の大悲心にほかならない。衆生を撰取してその重い現実である難度海を度し、無明闇を破して、尽十方無碍光の世界に呼び帰す、如来大悲の願心の現前、それが感得されているにほかならぬ。と同時に親鸞の智眼は、この大悲心のはたらくその根源に、如来の自内証の功德が回向表現されていることを、鋭く自証したのではなかったろうか。恐らくこの自証から、親鸞独自のあの名号解釈が由来したのではなかったろうか。

名号の解釈といっても、本願の名号の衆生における現実

態は、反復考察したように、本願の行信そのものであるから、この本願の行信に自証せられるものの自覚化にほかならぬ。本願の行信は「願成就文」には、「聞其名号、信心歡喜乃至一念」と教説され、『願生偈』には、「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来、願生安樂国」と表白され、また「行巻」には、「称無碍光如来名」と内容づけられている。殊に「行巻」の把握が、『論註』讚嘆門釈に依ることからも直ちに知られるように、本願の名号に帰した自覚である本願の行信は、全体これ大きな讚嘆であることに、私は十分の注意をしたのである。このことは取りも直さず、本願の名号に回向表現するもの、即ち名号に開示せられた如来の自内証の世界の功用に触れた自覚が、そこにしっかりと踏まえられていることをわれわれに告げているのである。

(1) 帰命者、本願招喚之勅命也。言発願回向者、如来已発願、回施衆生行之心也。

(2) 大行者、則称無碍光如来名。斯行、即是撰諸善法、具諸徳本。極速円満、真如一実功德宝海。

(3) 「本願名号正定業」というのは、選択本願の行というなり。「至信心樂願為因」というのは、弥陀如来回向の真実信心なり。この信心を阿耨菩提の因とすべしとなり。

「成等覚証大涅槃」というのは、成等覚というは、正定

聚のくらいなり。このくらいを龍樹菩薩は、「即時入必定」とのたまえり。曇鸞和尚は、「入正定聚之教」とおしえたまえり。これはすなわち、弥勒のくらいとひとしとなり。証大涅槃ともうすは、「必至滅度の願成就」のゆえに、かならず大般涅槃をさとるとするべし。滅度ともうすは、大涅槃なり。

(4)この如来の尊号は、不可称、不可説、不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲ののちかいの御なり。

(5)自力のころをすつというは、ようようさまさまの大聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのまず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

名号の意味を尋ね明らかにするこれらの了解によって、親鸞は名号においてはたらくものを、真実功德の現行として自覚していたことを、われわれははつきりと知ることができる。真実功德、より厳密には清浄にして真実なる功德、それは何よりも先ず無上涅槃の功德であり、それを内証する如来智慧海の功用である。この辺りの消息は、『一念多

念文意』において、不虛住持功德を解明する親鸞の論証が、雄弁に物語る通りである。

「功德」ともうすは、名号なり。「大宝海」は、よろずの善根功德みちぎわまるを、海にたとえたまう。この功德を、よく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつるがゆえに、大宝海とたとえたるなり。

それと共に、本願の名号においてはたらく、この清浄・真実功德を、「曇鸞讚」は鮮明に浮彫りにして、見事である。

名号不思議の海水は

逆謗の屍骸もとどまらず

衆悪の万川帰しぬれば、

功德のうしおに一味なり。

尽十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば、

智慧のうしおに一味なり。

のみならず、これらの諸文を一貫して、名号においてこの真如一実の功德宝海の功用をよく現前せしめるものを、親

驚は、自らの行信において確かに自証していたと考えられる、『願生偈』に、

観仏本願力 遇無空過者

能令速満足 功德大宝海

と讃詠されている、如来の不虚住持功德に見出ししていたことは、改めていうまでもなくはっきりと窺われる通りであろう。

このようにして、回向の事実である本願の名号が、衆生に真如一実の世界を開示しその功德を現前せしめる法であるとするならば、視点を變えていえば、それは真如一実の功德宝海たる如来智慧海に、衆生を招喚し、還歸せしめる功用をもつものである。一体、本願の名号の現実態である称名をもって往生浄土の行とすることは、善導・法然二祖の根本的信念であったが、そのことは善導の名号解釈、いわゆる六字釈をみても瞭然としている。その同じ名号を親鸞が解釈する時、例えば次のような名号の用らぎが、しっかりと捉えられている。

言必得往生者、彰獲不退位也。

さまざまな言葉で、親鸞はこの「獲不退位」という事実を語る。いうまでもなくそれは、大般涅槃道であり、名号の行信において現行する真如一実の功德に支えられて、真直

にその真如一実の世界、即ち大般涅槃の世界に開かれた生を語っているにほかならない。このような驚くべく讃嘆すべき功用を確認しつつ、親鸞は本願の名号をもって、回向の具体的事実と自覚自証したのであった。

四

このような功用をもつ本願の名号への帰入、即ち回向へ帰入する時、そこに一つの決定的意味をもつ出来事がある。それが即ち、回心である。この回心という出来事によって、回向の法たる名号への帰入が、帰入する衆生における主体の転成であること、従って主体の生の質的転換であることが、明確に浮彫りにされるのである。このような回心を親鸞の行実の上に求めるならば、それは建仁元年の出来事として表白されている、

棄雜行兮歸本願、

なる出来事が、まさしくそれに当たるであろう。「歸本願」とは、選択本願への帰入であり、それ故に一心歸命の信の発起にほかなるまい。そして「棄雜行」とは、例えば『唯信鈔文意』が、「自力の心をひるがえし、棄つる」をいうと解説する、回心の出来事にほかならないのである。

回心においてひるがえし棄てられる自力の心について、

『一念多念文意』は、

自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのむ、わがちからをはげみ、わがさまざまの善根をたのむひとなり。

と、その性格を鮮明にしている。この自力の心こそ、発菩提心、修諸功德する修道の努力を、「自力の仮門」たらしめ、また本願に帰して念仏するその称名を、「本願の嘉号を以て己が善根となす」という、根の深い暗さをもつものに交質せしめる執心であることに、十分の注意をすべきであろう。「棄雜行兮帰本願」と表白される、このような自力の心をひるがえし棄てるという回心と共に本願に帰入する時、そこに如何なる世界が開かれるのかについては、前引の『唯信鈔文意』の表白が、見事に語り尽くして余すところがない。

自力の心をすつというは、ようようさまざまの大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのまず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠活の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

このような、名号が開示する世界へ帰入する端的である

回心、それは虚妄の中に流転する我が、名号において現行する真如一実の功德に触れて転依する端的でもあるが、その回心を体験として表わすならば、それは五体投地の懺悔である。そこには、五体投地して名号のもとにひれ伏す我がある。一体その時、本願の名号に帰した我の上に何が起こったのであろうか。回心の内景は、一体如何なるものであろうか。

既に縷説したように、本願の行信の特質を、親鸞は如来清浄なる願心の回向成就と捉えていた。要するに、行信の因位に願心あり。このことがしっかりと自証されているのであるが、その如来の願心は、改めていうまでもなく、至心・信樂・欲生の三心として、教説される。この三心について、親鸞の推求は、次のような極めて立体的な了解をうち立てたのであった。

(1) 斯至心、則是至德尊号、為其体也。

(2) 以利他回向至心、為信樂体也。

(3) 以真实信樂、為欲生体也。

この願心の了解は、至德尊号に始まり欲生の願心に帰結する。その発端にある本願の名号の深い、そして積極的な意味は、「本願招喚之勅命」として明確に把握されていた。

三心が帰結する欲生心の深義は、「如来、招喚諸有群生之

勅命」とうなづかれている。してみると、三心を以て表わされる願心の世界は、それ故に回心の内景は、全体これ本願の名号の内なる出来事ということは、明瞭であろう。

このようにして親鸞の推求は、本願の名号に帰した一心帰命の信の自覚に立って、その一心の由って来たった因位を、遠く本願の願心にまで溯って尋ねていく。いわば一心帰命の信に、深くして遠い因位あり。その因位を竊かに推求していくのである。こうして、親鸞独自の三心の了解が生まれてくる。

至心 是以如来、悲憫一切苦惱群生海、於不可思議兆載永劫、行菩薩行時、三業所修一念一刹那、無不清淨、無不真實。

信業 正因如来、行菩薩行時、三業所修乃至一念一刹那、疑蓋無雜。

欲生 是故如来、矜哀一切苦惱群生海、行菩薩行時、三業所修乃至一念一刹那、回向心為首得成就大悲心故。

法蔵菩薩の発願と修行を語る『大経』の勝因段、勝行段の教説を踏まえ、それを一心帰命の信が衆生に発起する因位を語る教説と読み取った親鸞の読経眼が、ここにはっきりと示されている。私は親鸞のこの了解に、『大経』が教説

する法蔵菩薩の発願と修行の湛える厳肅さが、そのまま衆生における一心帰命の信の獲得の厳しさと二重写しになっているとの了解が、ひそかに託されていることを強く感ずる。行信が願心の回向成就であるならば、行信が衆生の上に発起していく道程は、その願心が成就していく道程にほかならぬではないか。「真實淨信実難獲」といわれる、その一念の淨信を獲得することの容易でないという厳しさが、実はそのまま、一切苦惱の群生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じたもうたと教説される、願心の歩みの湛える厳肅さを自証していく、經驗的立脚地なのではなからうか。

凡そ信心の因位は、求道心に求むべきであろう。その求道心の自覚的発起を促すものは、実に人生の現実が孕むさまざまな問題性であろう。それは例えば『歎異抄』が伝える述懐、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもって、そらごと、たわごと、まことのあることなし。

が浮彫りにしているように、生の虚妄性であり、煩惱の身を生きる痛みである。このように了解するならば、求道心の内景としてあるものは、無自覚なるままに自己に固執し

て流転する自我と、生に虚妄を感じ、それを痛み超克しようとする心との、厳しい戦いだといふべきではあるまいか。このような虚妄の中に流転する生を痛む心こそ、「如来悲憫一切苦惱群生海」なる願心を感じ得する、經驗的素材であるに違いない。こうして発起する求道心を長養するもの、もとよりそれは聞法のほかに、あるべくもないのである。

このような願心の歩む道程を自証する立脚地ともいふべき求道心が、衆生の虚妄なる自我に戦い勝ったともいふべき出来事が、取りも直さず信心の発起であり、その凱歌にも喩うべきものが、念仏申さんと思ひ立つ心の迸りであろう。この事実が名号の現行であり、その全体がこれ、願心の名告りであり、回向成就である。その時虚妄なる自我は摧破せられて、名号のもとにひれ伏す。これこそが回心といわれる事実であり、その體驗的実相である。そしてこの回心において、端的に自証されているもの、それを親鸞は「清浄心・真实心」と確認する。この清浄心・真实心こそ、衆生の穢悪汚染性、虚仮諂偽性をえぐり出し、これを摧破する功德力そのものである。こうして、一心帰命の信心の発起する端的に、衆生は流転し続けた自己の虚妄なる存在に、無始以来というほかはない無底の深さをもつ穢悪汚染性を、虚仮諂偽性を、万劫初めて自覚したのである。

それが、五体投地と表わされる挙体の回心懺悔の姿ではなかつたろうか。そこに、清浄にして真实なる願心の現行が、確かに自証されているのである。

親鸞は「信巻」における至心の解釈で、本願の名号を以て至心の体とし、その至心の特質を、真实心として明らかにした。してみると、如来の至心即ち真实心なる願心こそ、回心の根拠といふべきであろうか。至心積における衆生の虚仮不実性が、いわば鋭角的ともいふべき鋭さを以て浮彫りにされているのは、恐らくこのような真实心なる願心との値遇において、衆生の虚妄性が摧破せられたその回心の出来事が自覚的に踏まえられて、真实心なる願心が確かに推求せられた結果であろうか。

五

こうして、回心即ち如来の真实心の自証という内実をもつて発起した真实信心は、三心の解釈を通して親鸞が反覆明らかにするように、如来の願心に疑いのない心である。そこに改めて自証せられる願心、いい換えれば、回心した心に今更の如く自証せられる願心、それを親鸞は大悲心と云なづく。即ち『大経』に、信樂の願心として教説されるものである。大悲心とは、それに帰した衆生に、「悲憫苦

「惱衆生海」と仰がれる願心である。この願心に触れて今更の如く自覚される衆生の現実、親鸞はそれを、信樂の解積を通して次のように表白している。

從無始已來、

流轉無明海、

沈迷諸有輪、

繫縛衆苦輪、

無清淨信樂、無真實信樂。

ここに擬視されている衆生、それは苦惱の中に流転している全体が、底知れぬ虚妄性の中にあるものとして、信知されているのではないか。

このような衆生を悲憐して、如来の大悲心なる願心は動く。その大悲心の大悲心たる所以を、親鸞は次のように確かにうなづいたのであった。

斯心者即如来大悲心故、必成報土正定之因。

虚妄性の中に流転する衆生に、まさにその虚妄性を破りつつ眞実報土を開示する願心、そこに親鸞は如来の大悲心を深々とうなづいたに違いないのである。その眞実報土が「眞仏土巻」には無量光明土と表白され、『論』には「勝過三界道、究竟如虚空、广大无边際」と讃偈される畢竟淨の境界であることはいままでもないが、このような眞実報

土が、「流轉無明海、沈迷諸有輪、繫縛衆苦輪」なる衆生にとつて、如何に大きな恩徳であるかは、改めて確認するまでもないであろう。

大悲心に開示された眞実報土に、流転する諸有の群生を喚び帰そうとする願心、それが欲生心であるが、親鸞はこれを回向心と了解した。しかも信樂を体として欲生心ありというのであるから、信樂即ち大悲の願心は、自然に必ず欲生心即ち回向心として、衆生を眞実報土を開示された生を生かしめることとなる。その意味で、回向心こそ大悲の願心の動態といふべき願心であろうか。「回向心為首、得成就大悲心故」と了解される所以である。

この回向心なる願心は、

如来、招喚諸有群生之勅命。

としてみられるのであるが、この回向心が招喚せんとする諸有の群生の現実、それは、

微塵界有情、

流轉煩惱海、

漂没生死海、

無眞実回向心、無清淨回向心。

として擬視されるものであり、恰も『論註』が、
長寢大夢、莫知稀出。

と捉えたような生においてある衆生である。そしてこれは、名号において如来の真実心に触れた、即ち回心懺悔の内容として自覚された生の現実であったことは、いうまでもない。このような流転する群生にかけられる願心の、最も積極的な内実、それが真実報土への願生において、この空虚な流転の生を超越せしめようとする回向心に凝集的に表現されているのである。

再び、親鸞の回向心の了解を聞こう。

言欲生者、則是如来招喚諸有群生之勅命。

そして、三心を以て表わされる願心の第一、至心がその体

とする本号の名号についての、親鸞の了解を聞こう。

帰命者、本願招喚之勅命也。

両者が全く同一の内容であることは、極めて意味深い。こうして本願の名号に帰した端的、言葉を換えれば願心に莊嚴せられた世界を開示する端的である回心は等流して、如来の回向心の自証に根源化する。回心に始まる一心帰命の信は等流して、一心願生の願生心として、衆生を荷負して願心莊嚴の世界に、衆生を還帰せしめるのである。その全てが、回心の中の出来事である。

(本学教授 真宗学)